

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	熊本市	番号	15
-------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	児童生徒数
	川上小学校	599
	植木北中学校	147

※ 児童生徒数については、今年度、推進校に在籍する児童生徒数を記述する。

○調査研究の内容

1. 推進地域における取組

① 学力向上支援員の派遣

小学校3年・4年の学力向上対策について、学力向上に向けた支援が必要な小学校に対して、学力向上支援員を派遣し、児童の学力向上(算数)を図るとともに、学級、学年および学校の課題に即した支援を行った。

② 「学びノート教室」開催回数の増加と地域人材活用

「学びノート教室サポーター」(地域人材等)と協力して行う「学びノート教室」の制度をより周知するために、各家庭に案内を配布するとともに、地域社会へサポーター募集のポスターを掲示し、「学びノート教室」開催回数の増加と地域人材の活用を図った。

③ 国際教育の充実と地域人材(外国人)の活用

外国語活動及び英語教育の充実に向け、小中連携及びALTとの効果的なティームティーチングのあり方についてブラッシュアップセミナーを開催するとともに、ALTによる、小学校教師用クラスルームイングリッシュCD、ニュースレター作成や小中学校でのスピーキングテスト、サマーイングリッシュ教室の開催等、国際教育の充実を図った。さらに、生きた英語の実践的な授業を行うには、ALTの活用率を高めることが必要であるため、小学校外国語活動でのALTを地域人材の外国人に順次切り替え、中学校でのTT率の引き上げを図っている。

④ 調査研究推進校の指定

5区の中で一つの区を調査研究のための推進区として位置づけ、その区の中の小学校・中学校1校を推進校として指定した。推進校の指定については、小学校は、3・4年生の算数の学力に課題があり、3・4年に少人数指導の導入など特色ある取組ができる学校や

地域との連携を図ることが可能な学校を指定した。中学校は、小中連携について研究をしている学校で、英語に課題がある学校を指定した。

⑤ 学力向上推進委員会の設置

学力向上推進委員会を設置し、推進校の課題の明確化やその解決に向けて協議を行った。

【学力向上推進委員会】

	委員名	所属	職	役職等
1	濱平 清志	熊本市 教育センター	所長	熊本市教育センター所長
2	古閑 順子	川上小	校長	川上小学校長（推進校校長）
3	福永 俊一	植木北中	校長	植木北中学校長（推進校校長）
4	山下 英一	託麻原小	校長	アドバイザー（熊本市算数教育研究会会長）
5	毎床 三喜男	竜南中	校長	アドバイザー （県共通テスト担当、語ろう会・校長会研修担当）
6	馬場 正文	指導課	課長	教育委員会事務局 指導課長
7	竹下 恒範	指導課	教育審議員	教育委員会事務局 指導課 教育審議員
8	深川 慎也	川上小	教諭	川上小学校 推進校代表教諭一人（教務主任）
9	槇原 圭子	植木北中	教諭	植木北中学校 推進校代表教諭一人（研究主任）
事務局；田尻安洋指導課長補佐 岩下真也指導課長補佐 澤田伸一指導主事				

2. 推進校における取組

【川上小学校】

(1) 「授業実践データベース」に基づいた授業改善の工夫

算数の授業実践に当たり、①関心・意欲を高めるための問題提示、②思考力・表現力をはぐくむためのかかわり合い、③基礎的・基本的な事項の習得のための振り返りの工夫を視点として「研究実践データベース」を作成し、実践を進めた。

(2) 地域と連携した計算技能の定着のための工夫

知識や技能の定着をより確実にするために、地域と連携した取組として、①「わくわく算数教室」（地域との連携）と②「なるほど算数教室」（公民館共催）を行った。

(3) 学習習慣形成の手立て

学習習慣形成の手立てとして学校においては、①「チャレンジタイム」と「算数大会」、②環境整備（プリントの準備・整理）を行った。家庭においては、毎学期「家庭学習がんばり週間」を設定し、家庭学習を啓発した。年度当初には家庭学習の意義や各学年における留意点を記したプリントを全家庭に配布した。

【植木北中学校】

(1) 授業の工夫改善

①『授業三原則（聴く・考える・発表する）』の意識化、②「学び合い」活動を取り入れた授業づくりを行った。

(2) 習熟度別指導の工夫改善

3年生に対して放課後に習熟度別学習会を実施した。指導は、地域の学習サポーター（数学、英語各1名）と学習支援員と本校教師で行うという複数での指導体制を整え取り組んだ。

(3) 個に応じた指導体制の工夫改善

学力向上には連続性と継続性が不可欠であると考え、学習の場である朝自習・授業・家庭学習を1日の学習サイクルとしてとらえ、それぞれ「個に応じて」という視点をもち取り組んだ。

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

【川上小学校】

(1) 「授業実践データベース」に基づいた授業改善の工夫について

算数の授業における問題提示の工夫等により、問題に対して進んで取り組むようになったと感じている児童が増えている。また、話し合いのコーディネート工夫に取り組んだことによって、授業中の話し合いを自分の勉強に役立てたり、自分の考えを友達に伝えたりできると感じている児童も増えてきている。研究実践データベースに基づいた授業改善が子どもの主体的な学習につながってきている。

(2) 地域と連携した計算技能の定着のための工夫について

「わくわく算数」に参加した児童の多くは、自分にあったペースで問題を解くことができたり、個別に指導してもらえたりすることで安心して学習でき、参加して「楽しかった」と答えている。「なるほどザ算数」「わくわく算数」に参加した児童の保護者からは、ほぼ全員が参加させてよかったと回答があった。また、本年度の6年生の算数の全国標準学力検査（NRT）は昨年度より1.6ポイント上昇している。地域と連携して取り組んだ「なるほどザ算数」「わくわく算数」は学習意欲の喚起と計算力の向上に効果があった。

(3) 基本的学習習慣形成の手立てについて

算数学習に関する意識調査からは、進んで宿題や自主学習をするようになった児童が増えた。家庭学習に関して、学校と家庭が連携を図ることは学習習慣の形成のために効果的であった。

【植木北中学校】

(1) 授業の工夫改善について

授業についてのアンケートによると、班活動ボードを用いた「学び合い」活動を取り入れた授業づくりを行ったことで、基礎的・基本的な内容がわかる、自分の考えを発表する機会が与えられているなどの評価が上がっており、授業づくりの共通実践を行った成果が見られた。

(2) 習熟度別指導の工夫改善について

本県共通テストの結果から、英語では下位層の生徒、数学では上位層の生徒の伸びが見られた。特に、英語の「書くこと」の領域で習熟度別指導は効果的であった。

(3) 個に応じた指導体制の工夫改善について

家庭学習についてのアンケート調査の結果から、自分で計画を立てて勉強していると答えた生徒が増えるなど主体的な学習を促す効果があった。

2. 調査研究全体の成果

(1) 学びノート教室の拡張

地域と連携した取り組みとして行った川上小学校の「わくわく算数教室」「なるほど算数」、植木北中学校の「習熟度別学習会」は、確かな学力の育成のために効果的であることがわかった。学力向上推進委員会で検証を行った結果、両校の実践は本市が既に小学校で行っている「学びノート教室」に取り入れられることや中学校でも「学びノート教室」として実施が可能であることがわかった。

(2) 地域の教育力の活用

「学びノート教室サポーター」募集のポスターを地域に掲示したり、学校便り等で「学びノート教室」の取組の様子や成果を地域に発信することで、地域の教育力の活用を図ることができた。

(3) 放課後の習熟度別指導における抽出生徒の分析

本県共通テストの結果等から、抽出生徒の変化を分析すると、地域と連携した習熟度別指導によって、英語では下位層の生徒、数学では上位層の生徒の伸びが見られた。特に、英語の「書くこと」の領域で習熟度別指導は効果的であることがわかった。

(4) 学力定着に課題を抱える学校への支援

本市では小学校3・4年生の学力向上対策として、学力向上支援員の派遣を行い、学力の向上を図るとともに、学級、学年および学校の課題に即した支援を行っている。また、基礎・基本の問題集「学びノート」を作成し、小学校の全児童に配布している。さらに、その活用を通して、学ぶ意欲の向上や学習の習慣化を目指し、地域の教育力を活用した「学びノートサポーター」が対応にあたる「学びノート教室」を実施している。これらの取組が推進校での実践的研究を通して、学力定着に課題を抱える学校への支援として有効であることがわかった。

3. 取組の成果の普及

(1) 実践事例集の作成と配布

実践事例集（実践のまとめ）を作成し配布するとともに、熊本市教育センターのホームページに掲載し公開する。また、研究主任会において研究の概要を発表するとともに、算数・数学、英語の各教科主任会において本研究を紹介する時間を設け、本市の各小中学校へ成果の普及を図る。

(2) 学力定着に課題を抱える学校への普及

推進校と同様に学力定着に課題を抱える学校に対して、学力向上支援員を派遣するとともに、「学びノート教室」の積極的な活用を働きかけ、放課後だけでなく、長期休業中の実施や中学校において実施することで、取組の成果の普及を図る。

○今後の課題

- ①全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査等の調査を生かした検証改善の流れを各学校に定着させ、本研究の実践を生かした授業改善を図る。
- ②放課後学習・習熟度別学習会を継続させるために、「学びノート教室」を中学校に拡張するとともに、「学びノート教室サポーター」の確保ができる体制の充実を図る。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」

平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	熊本市	番号	15
-------	-----	----	----

推進校名	熊本県熊本市立川上小学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) 児童主体の学習活動を目指した授業改善
- (2) 計算技能の定着
- (3) 基本的学習習慣の確立

2. 重点課題への取組状況

(1) 「授業実践データベース（手引）」に基づいた授業改善の工夫

本校は5年前から算数の研究を行っている。昨年度からは本校独自に作成した「授業実践データベース（手引）」に基づいた授業改善を通して、重点課題の解決に努めた。算数の授業実践に当たり、①関心・意欲を高めるための問題提示、②思考力・表現力をはぐくむためのかかわり合い、③基礎的・基本的な事項の習得のための振り返りの工夫の3つの視点ごとに具体的な手立ての例を示し、それに基づいた実践と検証を進め、手立てのデータベース化を図った。

***授業実践例【4年かわり方】**（目標）2量の変化の様子を表に整理し、関係を□や○で式に表すことができる。



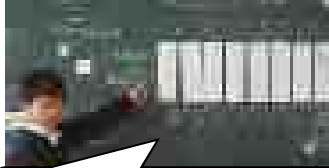
導入 問題に変数を設定し、児童に数を選ばせ多くのデータを集めることができるようにした。

具体的手立て・・【視点①問題提示の工夫】における (C) □のある問題

1辺が1cmの正方形を使って階段を作ります。 □だんのときの周りの長さは何cmですか。	□の数値を1～9から自由に選択させて取り組ませる。
--	---------------------------

かかわり合い 個々の児童が自分の当てはめた数値についての結果をカードに記して出し合う。

具体的手立て・・【視点②話し合いのコーディネート】における (D) 全体で考えをリレーしていく話し合い

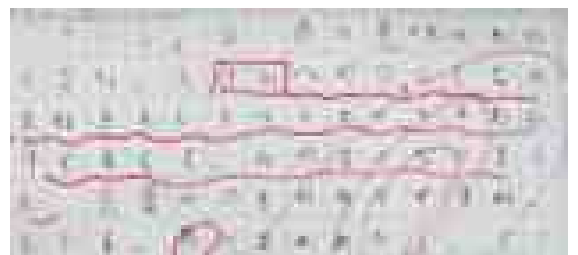
		
①不規則に並べたカードを児童の発案で小さい順に並べる。	②見えてきた変わり方（横の関係）を矢印等で表現する。	③縦の数値の関係に4倍の関係を見だし、確認していく。

段の数×4が周りの数になることを式に整理し、式「□×4＝○」に表した。

振り返り 「もしも100段だったら…」という児童の発言を受けて、複数の問題を提示して見いだしたきまりを適用した。また、その後、学習感想を交流した。

具体的手立て・・【視点③基礎・基本の定着の手立て】

における (E) 振り返りの視点、感想交流



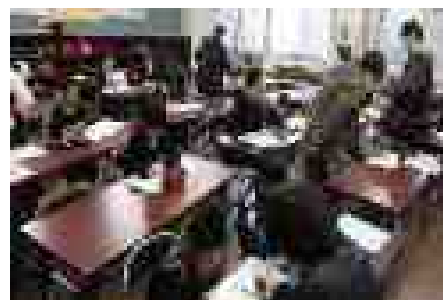
見方の変容を記している感想例（一部）

(2) 地域と連携した計算技能の定着のための工夫

知識や技能の定着をより確実にするために、地域と連携した取組を行っている。

①「わくわく算数教室」(地域との連携)【毎週月曜日放課後・4年生対象】

4年生を対象に、本年度より文科省の予算措置による事業を開催した。指導者は、学習サポーター(地域人材・学生)である。基礎・基本の徹底を目的とし、習熟度別に分けて実施している。参加児童数は上半期が40人程度、下半期は20名程度で児童の実態に合った問題を準備して行っている。



【わくわく算数教室】

②「なるほど算数教室」(公民館共催)

【毎週水曜日放課後・4～6年生対象】

以前より地域の公民館で放課後子ども教室の一つとして算数教室が行われていた。その取組を学校と連携して行った方がより効果があるのではないかと考え、小学校で実施することにした。公民館職員6人程度、本校職員2名の8人の指導体制で「なるほど算数」と称して開催し、40名程度の児童が参加している。児童が取り組む課題は、実態に合わせて本校職員が準備している。本年度は2年目の取組である。夏休みも4回実施した。



【なるほど算数教室】

(3) 基本的学習習慣形成の手立て

【学校における学習習慣形成の手立て】

①「チャレンジタイム」「算数大会」

既習事項の定着を目指して週2回の朝の時間に「チャレンジタイム」を実施した。「チャレンジタイム」の目的は児童に自信を持たせることである。そのため基本的な問題に取り組ませた。また、「算数大会」として学期初めにテストを実施し、その後、個別指導を行った。

②環境整備(プリントの準備・整理)

各学年で活用できるドリルやプリントを購入し、どの学年でも児童の実態に合わせ活用できるようにした。また、各学年の廊下に整理棚を設け、学年のプリントを準備して、習熟に応じた対応ができるようにした。

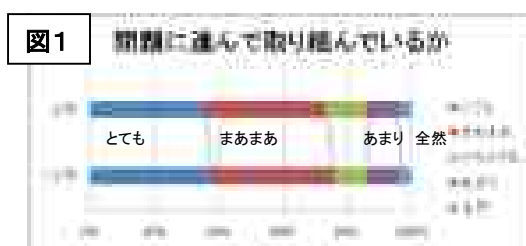
【家庭における学習習慣の形成】

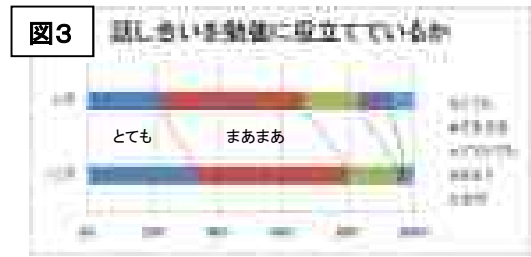
毎学期「家庭学習がんばり週間」を設定し、家庭学習を啓発した。年度当初には家庭学習の意義や各学年における留意点を記したプリント「家庭学習の手引き」を全家庭に配布した。家庭学習の内容は低学年では宿題に、中学年以上では自主学習にも取り組ませた。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 授業改善の工夫について

4年生の算数学習に関する意識調査からは、問題に対して進んで取り組むようになったと感じている児童が増えていることがわかる(図1)。授業における問題提示の工夫等により意欲的に取り組むように

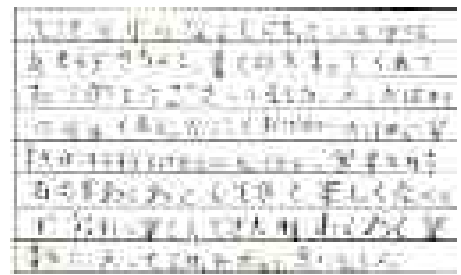




なったと考えられる。また、話し合いのコーディネート工夫に取り組んだことによって、授業中の話し合いを自分の勉強に役立てたり（図2）、自分の考えを友達に伝えたり（図3）できると感じている児童も増えてきている。研究実践データベースに基づいた授業改善が、児童の主体的な学習に結びつきつつある。

(2) 地域と連携した計算技能の定着のための工夫について

「わくわく算数」に参加した児童は計算等を苦手としている者が多かったが、多くの児童は算数教室が終わった時には「楽しかった」と答えている。理由としては自分にあったペースで問題を解くことができ、個別に指導してもらえることで安心して学習できるからのようだ。「なるほど算数」「わくわく算数」に参加した児童の保護者からは、ほぼ全員が参加させてよかったと回答があった。その理由

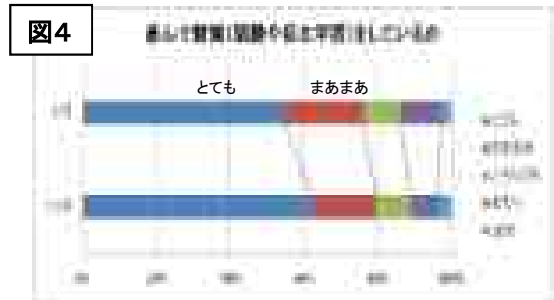


【わくわく算数に参加した児童の感想】

は、算数が苦手な子どもに個別に分かりやすく教えてくれるところ、算数が、以前より楽しいといっているなどであった。また、「子どもに何か変化はありましたか」の問いには、「自信がついた」「算数が好きになった」「意欲が出てきた」「自分で解く力を身につけてきた」「テストの成績が上がった」などの変化があったとの回答があった。また、本年度の6年生の算数のNRTは昨年度より1.6ポイント上昇している。この学年は、昨年度「なるほど算数」に参加した児童が多く、その効果もあったものと考えられる。放課後の算数教室は学習意欲の喚起と計算力の向上に効果があった。

(3) 基本的学習習慣形成の手立てについて

4年生の算数学習に関する意識調査からは、進んで宿題や自主学習をするようになった児童が増えているのがわかる（図4）。家庭学習に関して学校と家庭が連携を取るものの効果がわかる。



4. 今後の課題

- (1) 本年度の検証授業の考察を行い、成果と課題を整理する。その考察に基づいて「授業データベース」の項目及び内容の修正を行い、次年度のさらなる授業改善に生かす。学力向上については、新年度に実施する学力テストの結果分析をし、前年度の変容を検証して今後の指導内容を修正する。
- (2) 放課後の学習教室を継続させる。そのためのボランティアの確保を急ぐ。また、参加児童の実態把握のための簡易カルテの作成を行い、指導を効果的なものにする。低学年の学びの場の確保をする。放課後子ども教室に参加している児童については、同教室の授業における学びへの効果について調査し、運営内容について検証していく。
- (3) 家庭学習については、学校だけではなくPTAと協力した活動として見直す。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	熊本市	番号	15
-------	-----	----	----

推進校名	熊本県熊本市立植木北中学校
------	---------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) 『植木北中校区小中連携カリキュラム』を活用し、わかる喜びを味わわせるための授業の工夫改善
- (2) 学力の二極化に対応するための習熟度別指導の工夫改善
- (3) 一人一人の伸びを保障するための個に応じた指導体制の工夫改善

2. 重点課題への取組状況

本校は、熊本市の中心部から離れた田園地帯に位置し、全校生徒147名の小規模校である。素直で明るく純朴な生徒であるが、主体的に学習や行動をすることが苦手である。授業にはまじめに臨んでいるものの、一人一人が課題意識をもって学習に取り組んでいるとは言い難く、学習内容が定着せず学力が伸びていない。そこで、前述した3点を重点課題として取り組んだ。

(1) 授業の工夫改善

①『授業三原則（聴く・考える・発表する）』の意識化

小学校から継続して取り組んでいる『授業三原則』を授業の基本的な形とした。教師は学習活動の目的を明確にもち展開の工夫をすること、生徒は授業の基本的な流れを把握することで見通しをもって授業に臨むことをめざした。『授業三原則』は、全教室の前面に掲示しており、常に意識化した。

②「学び合い」活動を取り入れた授業づくり

授業づくりについて、校内・外で研修を行い、全職員で共通理解を図った。授業づくりで大切にすることとして、○学習課題の明確化、○課題提示の工夫、○見通しをもたせる工夫、○班活動ボードを用いた少人数グループの効果的な活用、○振り返りの工夫 等を取り入れた。

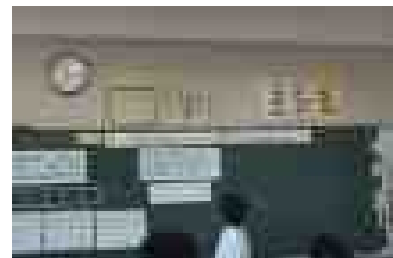
(図1・2・3) 小学校との合同授業研究会では、「自分の考えを図や表によく書いていた。小学校でも自分の考えを積極的に発表するよう指導したい。」「ペアやグループ学習の際に、相手に分かるように説明することや自分の考えを伝えることに抵抗を感じている生徒がいた。小学校から、風土づくりやスキルアップを図っていくことが大切だと感じた。」という意見をもらった。2学期、教師全員が研究授業を実施し、授業力向上を図った。



【図1 活動の工夫 ペア】



【図2 活動の工夫 グループ】



【図3 授業三原則 発表する】

(2) 習熟度別指導の工夫改善

4月の全国標準学力検査（NRT）の結果によると、本校生徒の学力偏差値は、熊本市の平均よりかなり低く、特に3年生の数学と英語では二極化も進んでいた。そこで、進路保障の面からも、3年生に対して放課後に習熟度別学習会を実施した。コース分けは、生徒の希望をもとに教科担当および担任で検討し、習熟度に応じて3コースとした。指導は、地域の学習サポーター（数学

・英語各1名)と学習支援員と本校教師で行うという複数での指導体制を整えた。9月から1月まで、各教科30回、計60回実施した。

基礎コースは、生徒の習熟度に極端な差があるので、個別学習と個別指導を中心に行った。(図4)多くの生徒がつまずいている内容は、まず一斉指導を20分程度行い、その後個別学習で対応した。自分のペースでわかるまで考えることができ、恥ずかしがらずに質問もできることから、学習会当初は集中力が持続しなかった生徒も1時間継続して学習に取り組んだ。

基本応用コースは、前半30分は授業形式で一斉指導を行い、後半30分は個別指導を行った。生徒がつまずきやすい内容の基礎・基本を徹底的に理解させ、その後、課題プリントで定着を図った。(図5)習熟度が同程度であることから、指導もしやすく、生徒も意欲的であった。

応用発展コースは、課題を自力で解き、分からない問題を友達と教え合ったり、個別学習を行ったりした。(図6)難しい問題を仲間と競い合い、また教え合いながら解決することで、生徒の学習意欲は非常に高まった。この学習会で、学習の楽しさを味わい、不登校傾向を解消した生徒もいた。

(3) 個に応じた指導体制の工夫改善

学力向上には連続性と継続性が不可欠であると考え、学習の場である朝自習・授業・家庭学習を1日の学習サイクルとしてとらえ、それぞれ「個に応じて」という視点をもち取り組んだ。この3つの場を『学習三原則』と名付け、全教室の前面に掲示し生徒への意識化を図った。具体的には、授業内容と関連づけた課題プリント等を作成し、朝自習と家庭学習で取り組ませた。朝自習は、毎朝20分間行う。1学期は、授業の基礎・基本の内容(漢字・計算・英単語・重要語句など)を繰り返して学習させ、2学期は、1学期の反省を踏まえ、本校の課題である読解力の向上をめざした。読書や100字程度の文を読み要旨をまとめる課題にも取り組んだ。各学年の朝自習担当が計画を立て、課題作成は教科担当が行った。その日の教科が他学年と重ならないようにし、担任と教科担当の複数指導が可能となる体制の工夫をした。

家庭学習では、宿題だけでなく、自分が理解できていない内容や発展的な内容を行う「自主学習」にも取り組ませ、担任に「自学ノート」を毎日提出させた。提出された宿題は教科担当がチェックした。生徒の宿題の過重負担をなくすため、各教室に「宿題ボード」を設置し、教科担当は他教科の宿題の有無や量を把握した上で宿題の量を調節した。学習の意義や具体的な各教科の勉強法を載せた家庭学習マニュアル『家庭学習のすすめ』を作成し、活用の仕方を指導した。



図4 基礎コースでの個別指導



図5 基本応用コース



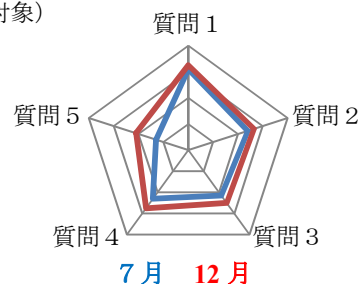
図6 応用発展コース

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 授業の工夫改善について

授業についてのアンケート調査の結果から(7月と12月実施、全生徒対象)

項目	7月	12月
質問1 授業の目標(学習の目標・めあて)がわかりやすい。	3.4	3.5
質問2 授業の基礎的・基本的な内容がわかる。	3.3	3.3
質問3 自分の考えを発表する機会が与えられている。	3.2	3.3
質問4 説明し合ったり、話し合ったり、助け合ったりする場面がある。	3.3	3.4
質問5 最後に学習内容を振り返る活動を行っていると思う。	3.1	3.2



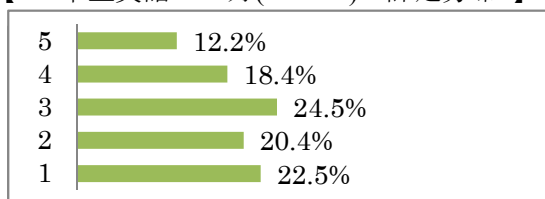
※4…あてはまる、3…ややあてはまる、2…あまりあてはまらない、1…あてはまらない

- ・全質問で、ポイントが上がった。授業づくりの共通実践を行った成果であると考え。
- ・質問2,3については、本校の課題であり、今後さらに取組を継続していく必要がある。

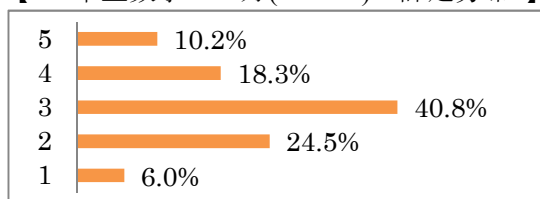
(2) 習熟度別指導の工夫改善について

① 学力検査等の結果から (4月以降の変化)

【 3年生英語の4月(NRT)の評定分布 】



【 3年生数学の4月(NRT)の評定分布 】



・英語の下位層の生徒が非常に多く、特に「書くこと」領域の全国比が **81.4** と低かった。

【本県中3生全員対象の共通テスト(9月・11月実施)での点数推移】 ※学習会参加率の高い生徒を抽出

英語	生徒	4月SS	評定段階	9月	11月
基礎	H	32	1	7	9
	S	33	1	10	14
	E	35	2	10	14
	Y	不明	不明	4	10
	S	45	3	14	20
	M	44	2	14	20
基本	Y	54	3	19	27
	M	58	4	22	36
応用	点数の増減、ほとんどなし				

数学	生徒	4月SS	評定段階	9月	11月
基礎	K	36	2	2	6
	E	43	2	6	8
他の生徒は点数の増減、ほとんどなし					
基本	U	48	3	23	27
	Y	44	2	18	22
応用発展	M	70	5	32	38
	U	70	5	34	40
	U	74	5	36	40
	T	72	5	40	40

・習熟度別学習会は、英語は基礎コースに参加した下位層の生徒15名のうち7名の点数が上昇した。数学は応用発展コースに参加した上位層の生徒7名のうち5名の点数が上昇した。英語では下位層の生徒、数学では上位層の生徒に特に効果的であることがわかった。

【平成26年1月(CRT)の結果】

・英語の「書くこと」領域の全国比が **87.0** になった。学習会はこの領域に効果的であった。

② 習熟度別学習会に対する生徒へのアンケート調査の結果から

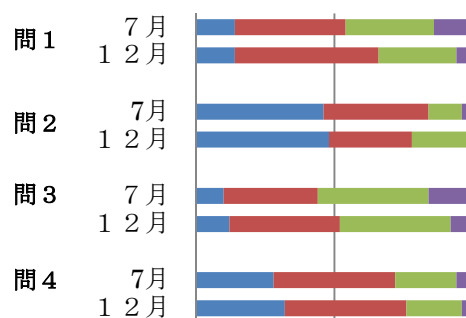
学習会に参加して「とてもよかった」生徒は20%、「よかった」生徒は80%である。学習内容が「わかるようになった」生徒は26%、「少しわかるようになった」生徒は50%である。感想では、「集中でき勉強がわかるようになった。」「勉強に対する意識が変わった。」「同じレベルの人と学習できてよかった。」「自信がもてた。」とあり、生徒の意欲関心を高める上でも習熟度別学習会は効果的であると思われる。

(3) 個に応じた指導体制の工夫改善について

○家庭学習についてのアンケート調査の結果から

(7月と12月に実施 3年生対象)

問1	家庭で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。
問2	家庭で、学校の宿題をしていますか。
問3	家庭で、学校の授業の予習をしていますか。
問4	家庭で、学校の授業の復習をしていますか。



※4・あてはまる、3・ややあてはまる、2・あまりあてはまらない、1・あてはまらない

・全質問で、4の割合が微増した。

・問1と問3の4・3の割合が50%を越え、自主的に学習に取り組む姿勢が見られた。

4. 今後の課題

本研究を通して、生徒の学習への意欲と意識を変えることが、学習内容の定着のために不可欠であることを再認識した。学習会への参加率が高い生徒の学力は予想以上に向上したことから、今後、全体的な学力向上を図るために、学習意欲の向上に視点をのこした研究を進めたい。また、家庭学習の手引きを作成し、一人一人の家庭学習の取組を見取りながら指導に臨んだが、今後も、生徒の主体的な学習を支援する取組の推進を図っていききたい。